新田次郎全集 4

富士山頂
アイガー北壁

新潮社版

富士山頂・アイガー北壁
新田次郎全集第四巻
昭和五十年四月二十五日発行
昭和五十三年十月二十五日六刷
定価一一〇〇円
著者 新田次郎
発行者 佐藤亮一
発行所 新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162 振替東京四一八〇八
電話 業務部03(266)五一一一 編集部(266)五四一一
印刷 株式会社金羊社
製本 神田 加藤製本

© Jiro Nitta, 1975, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

富士山頂 5
＊
山の鐘 135
三つの遭難碑 153
ホテル氷河にて 171
黒い雪の夢 187
翳りの山 205
怪獣 243
氷雨 259
チロルのコケモモ 273
アイガー北壁 287

凍った霧の夜に　305
コブシの花の咲く頃　320
解題　350

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

富士山頂・アイガー北壁

富士山頂

第一章

1

大蔵省は夕靄に浮く豪華船のように見えた。付近のビルの窓の灯が全部消えても、大蔵省の各階の窓には煌々と電灯が輝いていた。十二月に入ると毎年きまって見られる、この界隈の夜景であった。

主計局のその部屋には机が三十ほどもあって、机の数の三倍ほどの人間がそこに密集していた。椅子に坐っている者も立っている者もいた。

三十の机は四つの群れに別れており、それぞれの群れを監督するような位置に大蔵主計官のテーブルがあり、主計官の机の前には係員の机が向い合って並んでいた。主計官の机と係員の机との間には無理すれば三人ほど坐れる余地があった。そこに五人ほどの人が無理矢理坐り、尚その脇に資料の書類をかかえこんだ男が数名立っていた。暖房の効いている部屋ではなかったが、寒さは感じられなかった。人いきれのせいだった。

主計官は夜の窓を背負って坐っていた。

窓をとおして国会議事堂が夜空の中に黒く浮き出して見えていた。

気象庁測器課長補佐官葛木章一はその窓とは反対側の廊下側の壁を背にして立っていた。彼と同じように、多くの人がそこに立っていた。各官庁から予算説明に来てその出番を待っている人達であった。

四つの主計官のテーブルの前でなされている予算説明の声が入り乱れると、双方の話し声は自然に高まっていき、やがてその頂点に達すると、またもとのとおりに沈んでいった。

葛木章一は真直ぐ前の主計官の前で懸命に予算の説明をしている一団の人々を見ていた。

「こんな杜撰な予算要求資料って見たことがありませんね」

という声がしたあとで、

「おつぎの方どうぞ」

と言う声がした。それまで、机に頭をつけるようにして低い声で説明をつづけていた半白の頭髪が揺れた。なにか

言ったが主計官はその男の顔を見ず、その男をよけるように身体を乗り出して、おつぎの方どうぞと言った。次にひかえている官庁の名前を呼ばずに、おつぎの方という表現を使うのは、その主計官がひどく機嫌の悪いときであった。こう言われたときはその予算説明が不成功に終ったことを意味した。つまり、その初老の男にとっては、提出した予算が却下されたことを宣言されたのと同然であった。初老の男は真蒼な顔をして立上った。その男を部下が支えて、葛木が立っているすぐうしろのドアーを開けて廊下に出ていった。葛木の周囲にいた男たちが、ひとかたまりになって主計官の前に坐った。

誰かが廊下に通ずるドアーを開けたとき、吹きこんで来た風が、主計官の机上に積み上げられた分厚い予算書の頁をまくった。主計官の鋭い眼が、前の官庁と入れ替って彼の前に坐った気象庁代表の予算説明者の顔をひとわたり見た。その眼に睨まれただけで、関係者はひどくあわてたように、ぺこりぺこりと意味のないおじぎをした。

「では説明申し上げます」

気象庁会計課長が低いおどおどした声で言った。主計官はそれには返事をせず、傍に立っている部下になにか持って来るように言った。部下が資料を持って来るまでの間、主計官は予算項目に眼をとおしていた。係官が資料を持って来てテーブルの上に置いた。主計官はその資料にひととおり眼をとおしてから、前に積み上げてある資料をぺらぺらとめくった。そして驚くばかりの手際のよさで、予算書の間に観世縒を挟みこんでいった。

気象庁会計課長の隣に勝田会計課長補佐官が坐っていた。勝田が左足で内村会計課長の足をつついた。

勝田補佐官が、予算説明中にたくみに足をとばして信号を送るのは気象庁独特のやり方だった。勝田は予算説明のベテランだった。入口の壁を背にして立っている葛木には勝田の足の動きがよく分った。

「富士山レーダーから始めていただきましょうか」

主計官が言った。内村会計課長は、しばらくは、それをどう受け取っていいやら困った顔でいた。予算書の頁を追って説明していくのが当り前であるのに、いきなり富士山レーダーから説明しろということは考えられないことであった。

「新規事業のうち金額の多い方から順に説明申し上げるのでございましょうか」

勝田が言った。主計官はそれには答えず廊下側の壁のあたりに立っている一群の予算説明予備員の方へ眼をやっていた。

「技術の方が来ていますか」

「はっ、来ております」
勝田は主計官の意外なことばに反射的に腰を浮かせた。予算の説明は会計関係の事務官によってなされることになっていた。事務官に説明できないような専門的な問題があった場合にのみ技術関係者が呼ばれるのである。一般説明に入る前に技術について聞くことはあり得なかった。
「どうしたのですか」
主計官は勝田の顔を見た。主計官の疲れていらだった眼が勝田を責めていた。
小柄な勝田は机と机の間をすりぬけるようにして葛木のところに来ると小声で言った。
「葛木さん気をつけて下さいよ」
予算説明には予算説明のしきたりがある。なにを言ってもいいというのではない。勝田はそのような一般的注意を与えようとしたのであった。
葛木は予算説明の予備軍であった。この季節になると毎年ここへやってきて、壁の花として終る場合が多かった。発言を要求されたとしても、それはごく簡単なことであった。葛木は勝田の右隣の椅子に坐った。
「あなたは富士山に登ったことがありますか」
主計官の第一問だった。
「あります。昭和七年から昭和十二年まで、年間を通じて三カ月は富士山観測所におりました」
「それでは、富士山のことをよく知っているはずですね。では聞きますが、富士山頂で工事ができる日は一年に何日ありますか」
「七月、八月の二カ月です。そのうち雨や風の強い日を除くと、実際に仕事のできる日は四十日ぐらいだと思います」
「一年間実働四十日というわけですね」
主計官が念をおした。勝田の靴が葛木の靴にからんだ。注意して答えろというふうにからんだ足を引張った。焦点をうまくぼやかして逃げろという注意でもあった。
「そうです、平均して見ると四十日ぐらいでしょう」
主計官の口元に微笑が浮んだ。
「一年に四十日として二年間に八十日ですね、八十日間にこれだけの大工事ができると思ってあなたはこの予算書を出したのですか」
「やれる自信がない予算を出す筈がないじゃありませんか、その方法を具体的に申し上げましょう」
葛木はその主計官のあびせかけるような言い方が気に喰わなかった。二時間も待たされていらいらしていた。葛木はこの場ではめったに聞かれないような反撥的な答え方をした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「それでは工事の具体的方法を五分間で説明して下さい」
「五分間ですか」
「できませんか」
「できます。二分でやれと言うなら二分でもできるでしょう」
勝田が、葛木の足を痛いほど踏みつけた。葛木はその勝田の足が邪魔だった。うるさい、おれはきさまのロボットではない。おれには、おれの流儀がある。葛木は、勝田に踏みつけられた足を引き抜くと、勝田の踝のあたりを蹴った。
「それじゃあ二分間で説明して貰いましょうか」
「問題はレーダーの機械を収容する建物の工事です。二年間で完成するかどうかの決め手は輸送方法とその能力です。頂上での工事は七月八月と限定されますが、材料運搬は別です。頂上で工事にかかる前に材料が全部運び上げられているならば、建物自体の工事は八十日あればやれます。だから、私は雪線追従作戦を取ります」
「雪線追従作戦てなんですか」
「富士山登山路の雪が消えるのは六月末です。年によっては七月になっても八合目以上雪が残っていることがあります。その雪が消えるのを待ってはおられません。雪の消えるあと、あとを追っていって……つまり雪線を追ってどんどん荷物を上げていくのです。おそくとも五月には輸送を開始します」
「あなたは元軍人でしたか」
主計官は予算書の上に雪線追従作戦と書いた。
「残念ながら私はその経験がございません」
「それで、機械はどうして上げるのですか」
「二年目の八月末か九月のはじめまでには建物ができます。機械はヘリコプターで上げます。五日あれば全部運び上げることができるでしょう。富士山頂をヘリコプターが飛べるような静穏な日は、年平均十日はありますから——」
主計官は腕時計を見た。
「五分間経ちました。あなたの言うことはよく分りました」
「まだ富士山レーダーがなぜ必要であるかと言うことは説明申し上げてはおりませんが」
「必要理由は何度か聞きました。——全国の測候所から入って来る電報を集めて天気図を作り、台風の位置をきめるにはどんなに早くしても一時間はかかる。その間には台風は五十キロも突走ってしまうこともある。ところが、レーダーには一秒の遅れもなく、台風の姿が映る。そのレーダーを富士山頂におけば日本全国に睨みが効く——こういう説明は去年も一昨年も聞きました。この気象庁の説明資料

にも、いささかくわし過ぎるほど書いてあります」
「ではもう……」
「ちょっと待って下さい。このくどくどと長ったらしい説明文をひとことで言い表わすことばはないでしょうか、さっきあなたの言った雪線追従作戦といったふうな直観的な表現はないでしょうか」
「台風の砦を富士山頂に作ると考えたらいかがでしょうか、台風という敵がこの砦の南方八百キロメーターまで近づけば、これを捕捉することができるのです」
「台風の砦ですね、なるほど、これはいける。いただきましょう」
「予算の方はどうなるでしょうか」
「よく検討して見ます」
そのときはもう主計官は葛木から眼をそらしていた。

2

葛木章一が課長補佐官として勤務している気象庁測器課はもともと戦争中に軍が建てた物置を改造したものだった。昭和十九年に建てられたのだから極度に建築材料を惜しんでいながら、手間をはぶくために鎹がやたらに使ってあった。床は隙間だらけで床下から寒い風が吹き上げて来た。暖房用として石炭ストーブが二個あったが、ぼろ庁舎の内部を暖めるまでにはいたらなかった。
夜が更けると、寒さが身にしみた。
予算対策として残された数人の課員は、ストーブをかこんで大蔵省からの内示を待っていた。おそらくこれが最後の内示で、それ以上復活要求は無駄となるだろうと思われたが、一応、復活要求の資料作成のためと、毎年のことながら、なにか、居残っていないと気が済まないような、責任感にとらわれて、関係課は必要以上の人間を夜おそくまで残していた。
十一時を過ぎたころ測器課長の村岡と補佐官の葛木に会議室に集まるように電話があった。スモッグの深い夜であった。
ふたりは黙って外へ出た。予算のことはストーブを囲んでいやというほど話し合っていた。もう話すことはなかった。村岡は、三年つづけて出した富士山レーダーの予算は今度もおそらくだめだろうと思った。だめだろうとあきらめると、すぐそのあきらめた心の奥から、もしかしたらという期待が浮んで来た。村岡はこの道を去年の今ごろも同じような気持で通ったことを思い浮べていた。
気象庁は新庁舎の建設中であった。板がこいに沿って暗い電灯の下を歩いていくと、生コンクリートの臭いがした。村岡が立止って、ほぼその形態を整え始めた建物に眼をや

ると、葛木もそれにならった。新庁舎ができると、九階建ての屋上に富士山頂から送られて来る、富士山レーダーの映像を受け止める、大パラボラアンテナが取りつけられることになっていた。予算が通ったらという期待が村岡と葛木の眼を同時にそっちに向けさせたのであった。ふたりはまた歩き出した。建設現場を離れたところに、一段と明るい照明灯があった。その照明灯を背に負うと、ふたりの影が並んだ。村岡の影の方が葛木よりやや長く延びていた。

「葛木君……」

村岡はなにか言おうとしたが、それをやめて、急に寒さでも感じたように、肩をすぼめて大股で、歩き出した。

建設現場と隣合せて、戦前に建てられた木造二階建ての庁舎が四棟建てられていた。その中の一棟だけに電灯が輝いていた。

二階の会議室に入った途端、村岡は、いままでと違った空気を感じた。毎年の予算期の年の暮に、この会議室で感ずるものとは違ったものであった。例年ならば、なにかそこに絶望的な空気が流れていた。それは部屋に入ったときにすぐ感ずるものであった。が、今年は違っていた。明るい会話が聞えた。勝田補佐官が話の中心となってしゃべっていた。大きな黒板には、大蔵省から内示された予算額がこまかい字で書いてあった。村岡が黒板に眼を向けるのと同時に、勝田が立上って、

「測器課長さん、おめでとう」

と言った。勝田は相好を崩していた。村岡は富士山レーダーの予算が通ったのだなと思った。

「だいたい要求額に近い二億四千万円ですよ、たいしたものですな」

たいしたものですというのは、いささか勝田の自画自讃のように聞えたが、その場ではへんではなかった。

「そうですか、通りましたか、やっぱり」

やっぱりと言ったのは、その当てがあったというやっぱりではなく、むしろ予期していたことと反対の結果がでたことに対する驚きを示すやっぱりであった。

村岡は、勝田をはじめとして彼の周囲にいる誰彼になくありがとうを言いたい気持だった。勝田が坐れと言ったが、村岡は立っていた。富士山レーダーの予算さえ通ってしまえば、あとはもうどうだっていいんだというような気持だった。

「村岡さん、雪線追従作戦ってあるんですか」

内村会計課長が椅子にかけたままで言った。

「雪線追従作戦、知らないね、なんですかそれ」

「葛木さんが、主計官の前でそう言ったんです。主計官がそれにたいへん興味を持ったようでした。つまり、富士山

レーダーの工事は雪が消えるのを追うようにやらねばならないということらしいです」
内村会計課長は、黒板の前でノートに予算内示額を筆記している葛木の方へ眼をやって言った。
「葛木君の創作だよ、彼はそういう言葉を咄嗟に発明する天才だからね。それにしても富士山レーダーはよく通りましたね、たいへんだったでしょう」
村岡は内村会計課長の努力にむくいるような言い方をした。
「おたくには、言いませんでしたが、私は必ず通ると思っていました。今年で三年目でしょう、大蔵省は既設の気象レーダーが予想以上の活躍を示している実績から気象レーダーによる気象現況の直接把握が気象災害防止の役に立つということに気がついていたんです。あの人たちは意外とよく勉強していますからね、結局大蔵省当局が富士山レーダーの効力について充分な認識を持ったということと、もうひとつ大事なことは、これだけの予算の規模にもかかわらず先生（代議士）方がちょろつかなかったのが大蔵当局に好感を与えたということでしょうね」
内村はそう言って笑った。
村岡はこの朗報を測器課に残っている者たちに一刻もはやく知らせてやりたいと思った。
部屋に帰ると、そのことはすでに電話で伝えられていた。ストーブの上に薬罐がかけられていた。酒のにおいがした。
「用意がいいんだな」
村岡は業務係の平山に言った。
「富士山レーダーの予算は通ると思いましたよ。三十八年度、三十九年度の二年継続事業とすると、富士山レーダー完成の年は丁度トウキョウオリンピックの年に当りますからね」
その平山のことばに富士山レーダーとは関係がないだろうと誰かが言った。笑い声が起った。さっきまでは、ストーブを囲んで、まるでお通夜のようにしていた課員たちの変り方は現金すぎて見えた。
葛木が帰って来た。平山が、各自の茶呑茶碗に、少々お燗のつきすぎた、薬罐の酒を注いで廻った。
「乾杯といきましょうか」
平山が言った。課員は茶呑茶碗を眼よりも高くさし上げた。
「通ったはいいが、さてこれからがたいへんだ。いったいなにから先に手をつけたらいいのかな」
井川調査官はひとりごとのように言った。そのことばが、居残っていた五人の課員の浮き立っている心をいくらか押えたようだった。話はやや技術的な方向に変ったが、そう

長くは、つづかなかった。

「今夜はおそいから帰ろう、まあなんとかなるさ」

それまで黙っていた葛木が言った。それが合図のように、課員は帰り支度を始めた。

葛木補佐官の机は、課長と課員との間を遮断するように置かれてあった。課長の村岡の席からは、課員の動静を見ることはできず、常に葛木補佐官の背中とやや薄くなりかけた頭しか見ることはできなかった。この席の配置は村岡が決めたものではなく、彼がこの課の課長になって来る前からこのようになっていた。

村岡は机上のものを鞄につめこみながら、葛木の方を見た。葛木は机によりかかったような格好でなにか考えこんでいた。

「帰ろうや葛木君、富士山レーダーのことは明日にしよう」

すると葛木ははっとなったように身をおこして村岡の方へ来ようとした。だが、急に思いとどまったように、がたがたと机の上の整理を始めた。

村岡にはその夜の葛木がいつもの葛木ではないように思われた。いつもの葛木ならば、さっきのような場合、真先に発言するし、他の発言に対してうるさく干渉する男だった。その彼がまあなんとかなるさと言ったことはおかしいし、村岡に呼ばれたときの葛木がなにを考えていたかが問題のように思われた。

3

村岡は新気象庁長官に内定した波多野から新観測部長昇格の内命を与えられたとき、さすがに嬉しそうな顔をした。村岡は波多野に短い言葉で礼を述べ、そして、彼の表情は急に固くなった。村岡は新しく長官となるべき人の顔をしみじみと見た。波多野の顔は喜びに溢れていた。希望と抱負に輝いている顔だった。村岡は、波多野と同じように、新観測部長を内命された喜びをなぜ持続できないのか自分ながら不思議に思った。彼の昇格が余りにも遅きに過ぎたため、昇格の喜びと同時にそれまでの長い忍従の歴史がよみがえったのかもしれない。だが昇格がおくれているのは気象庁全般の傾向であって、彼だけが遅れているのではなかった。

「あなたが観測部長となる以上、観測部各課長の人選はあなたに一任します。特にいままであなたがやっておられた測器課長の人選はよく考えて下さい。富士山レーダーという厄介なことがありますから」

波多野の言葉に村岡は、大きくうなずいた。新観測部長の内命を受けても、有頂天に嬉しくなれないのは、いま彼

の眼の前で、新長官となるべき人が言った厄介なことにあるのだと思った。富士山レーダーという厄介な仕事が、彼の昇格と同時に、その責任段階を高くして迫って来るように思われた。

「富士山となると日本中の眼が集まりますから」

波多野は静かに言った。村岡は、なにか言おうとしたが、やめた。彼は、丁寧に挨拶すると波多野の部屋を出た。出てすぐ村岡は、波多野の前で、測器課長の後任は葛木以外にはいないだろうとなぜ言わなかったかを悔いた。村岡は、測器課の部屋へ帰るまでに、彼の考えについてもう一度吟味し直そうと思った。考えながら歩くと、彼は足を引きずる癖が出た。村岡はゆっくり階段をおりていった。大蔵省が富士山レーダーの予算総額二億四千万円を認めたということが、新聞、ラジオ、テレビで報道されて以来、村岡は五日間に、マスコミ関係、メーカー関係を合わせておよそ五十名の来訪を受けた。彼等は、そのレーダーが、出力二千キロワットという超大型レーダーであり、そのレーダーの探知距離は八百キロメートルに及び、しかも、東京気象庁において遠隔操縦をするという画期的構想の内容に興味を持っているのではなかった。対象が富士山だからであった。富士山の上に世界一のレーダーを設置するという、謳い文句に魅せられて集まって来たのである。そのレーダーが気象災害防止にいかに役立つかということより、レーダーは、いつどうして、どんなふうにどのメーカーによって作られるのだ、その完成想像図を見せてくれというような者ばかりであった。それらの人たちの中で富士山レーダーに対してもっとも強い関心を示したのはメーカーであった。儲かる仕事だからとびついて来たのではなく、富士山だから異常な関心を示したのであった。予算の内示があったばかりの段階において、うちは採算を無視しても富士山レーダーをやりたいと思っていますというような熱っぽいことばを吐く営業部員の顔を見ていると、村岡は、結局この富士山レーダーという仕事で一番苦労させられる相手は、メーカーだと思った。メーカーの選択、メーカーの指導、メーカーの監督如何がこの仕事の鍵を握っているように思われた。

村岡は葛木の傲慢にも見える風貌を思い浮べた。業者に対してひどく頭が高く、時によると相手を虫けらのように怒鳴りつける葛木の鼻っぱしらの強さがこの際必要に思われた。葛木が業者に対して、そのようなきびしい態度を取るのは、あらゆる場合を考慮して、彼が業者たちの御機嫌を取る必要がないからであった。葛木章一は作家としての副職を持っていた。公務員の俸給よりはるかに多い収入を原稿によって得ていた。しばしば葛木の経済的安定感は、彼を職場において孤立させた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.